NEXT Vol.5 ～次世代の農業者の夢・ビジョン～

次世代を担い、農業の未来を拓いていく若手農業者。彼らとビジョンを共有し、夢を実現させようと奮闘するTAC。二人三脚、模索を続けながら生活者に思いを伝える姿をリポートする。

▼若手農業者 本多雅史(左) JA島原雲仙 TAC 山﨑可織(右)㊤

▼本多雅史(左) 知香(右)夫妻㊦

▼「おいしい恋」では農業体験を通じて多くのカップルが生まれている㊨

地元消費をもっと増やす

遠く有明海を望む山の斜面にハウスが連なり、やわらかな陽光に輝いている。「地元の人にこそ、南島原産トマトを食べてほしい」。長崎県南島原市のトマト栽培農家、本多雅史(33)は、力説する。近所の大型スーパーの陳列棚には他県産のトマトが並び、何の疑問も持たずに買い物かごに入れる生活者の姿があった。「数は力。地域の核となる農業をもっと盛り上げなければ」と生産量の多い産地に押される歯がゆさを感じる。「ここで、汗を流している仲間がいることをもっと伝えたい」。

東京でサラリーマンを7年間続けてから地元に帰り、就農した。父親と同じトマト農家として土地に根を張って生きることを決めた。所属するトマト部会の会員は65人で、50代の家族経営が中心。高齢化で辞めていく農家もいる中で、栽培技術の継承、産地の知名度を上げるために全体で出荷量を増やしていくことや、もうける仕組みづくりを通じた若手農業者の獲得――。部会の将来を左右する多くの課題を前に、自分ができることは何かと自問した。実力をつけ、経営者として足元を固め、周囲から認められることが重要だった。一人が突出して良くてもだめ。山間の地で、助け合って生きてきた歴史がある。

横のつながりをつくるために、JAの青年部に入った。自分が認められるための一つの答えが、地元のJA島原雲仙のTACらが支援する「婚活」だった。

出会い通じて「営業マン」

本多は、「TACはかゆいところに手が届く存在」と話す。JAの「おいしい恋」と題した婚活イベントは、組合員の要望をもとに、平成22年度から継続して、年3回開催している。農業体験を主体に、ホームページやチラシ、新聞の告知で集まった農業に興味がある独身女性と、若手農業者との出会いの場を提供するもの。TACらは黒子に徹し、企画運営は青年部の手で担うのが特徴。参加者を"お客さん"にしないことで積極性が生まれ、26年12月現在で12組が結婚し、27組のカップルが誕生している。TACの山﨑可織(22)は「地域にとっても次世代につなげるための重要な取り組み」と思いを語る。

このイベントを通じて、本多は26年に結婚。福岡県出身でサラリーマン家庭で育った妻の知香(28)は、知り合いのいない島原と農家の一員として生きることを選んでくれた。決め手になったのは、本多がイベントで披露した「10年後のプラン」だ。「部会の中の誰よりも反収をあげる」。将来を担う世代としての決意表明だった。宣言通り、営農情報を読み漁り、肥料の葉面散布を欠かさないなど生育に良いとされることはすぐに実行に移した。農業は自分との戦い。彼女のためにも、地域をもっと良くしていく。これから生まれてくる子どものためにも、もっとおいしいトマトを作り、より反収を上げ、生活も豊かにしたい。最近、妻の友人からトマトについての問い合わせを受けるようになった。「食べてくれる人がいるからがんばれる。妻は一番の営業マン」と本多は微笑んだ。（敬称略）

TAC(タック)とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの役割
①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来
Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL:03-6271-8276　www.zennoh.or.jp

全農